特選

形のない涙

南川瀬町
横谷沙智

人の心は移ろう日々の色彩を
万華鏡のように鮮やかに映し出すけれど
不埒な泥流が氾濫しながら押し寄せると
澄んだ輝きは抗う間もなく濁りで満たされる

人の在り方は人の数だけ違うのに
なぜ花のように生きる事は時に否となるの

形のない涙を流す人を私は抱き締めたい
繋がる事は支配ではなく自由を許し合う事と
気付けたらこんな冷たい雨は降らないのに
ずぶ濡れの心は自分の庇い方さえ解らないよ

捨てるものと残すものどちらに選んでも
悔やむ者は己の輪郭も持てずにいるのに
核となる部分を他の誰かに担ってもらおうと
疑う事を知らぬ者に固く結び付き離れない

無傷でいたいから犠牲を強いているのね
だけど誰も傀儡として生まれた覚えはない

形のない涙を流す人を私は抱き締めたい
重なる事はうわべではなく深淵に触れる事と
気付けたらこんな冷たい雨は降らないと
ずぶ濡れの心の同志として傘も差さず歌うよ

（評）人と人との繋がりが希薄になってしまった現代。哀しみを抱えて発せられた言葉が、強い説得力で迫ってくる詩でした。重い主題への取り組みが、フレーズごとに異なるアプローチで繰り返し語られて、作品の深みを増しています。

特選

夢みる約束

犬上郡豊郷町
藤田始宏

消し忘れたテレビに
ミサイルが映って

ボクは眠りたくない
ボクは起きたくない
ボクは働きたくない
ボクは愛したくない

傷ついても
希望だけ
未来だけ
失わない

だからこれから夢を見る

声にはならないけど
ボクたちは叫んでる

夢は飛んでいく
星いっぱいの空に

（評）鋭い文明批評を展開しながらも、力強いリズムといきいきした表現が簡潔で若々しく、作者と言葉の一体感がとても自然に感じられました。繰り返しの効果が上手く出ている作品だと思います。

特選

おい

西今町
やまかみ まさよ

人なつっこいめをして
心やすく肩をたたいてくる
素知らぬふりをする　私
どこか遠い街で出合ったか
肩越しに再び　おい

すれ違いざまに肘でも触れたのか
反省と言い訳を
くちごもっている　ちょっとのま

失恋の時の胸の疼きを　ふと思い出す
いや　二、三日前の右足の打ち身か
それとも昨夜の　人さし指の切り傷の痛みか

スクランブル交差点の雑踏の中
穏やかな面もちで　後になり先になり
近づいてきては耳元に　それとなく
囁きかけてくる　老（おい）。

（評）二十行に満たない短い詩の中に、巧みなレトリックが組み込まれています。「おい」という言葉のユーモアを交えたフレーズに気を取られていると、最後に「老い」が現れる。各連の構成も新鮮です。

入選

待合室

東近江市
前川利孝

長い時間眠った様な気がする
名前を呼ばれた声に起こされたが
空耳だった

不安が飛び交う病院の待合室に居る
過ぎてしまった平凡な過去と
最悪であろう未来への助走がからまる
不機嫌な患者の群れ
私は群れに同化して置物と化す
沈鬱を保つ空間に
一人の発する咳き込む音が
秩序なき待合室の
わずかに残っている統制を乱し
澱んだ空気をさらに掻き立てる

病魔が
居心地がいいのだろう
体内に居座り
それから醸造せしめた
続く微熱が
動作の鈍さと曖昧さを助長する

名前が呼ばれ
この待合室から抜け出ることが
今唯一
救われる希望であるとまで思い詰めた矢先に
今度こそ名前を呼ばれ
物憂げに立って
急ぎ救世主の待つ
診察室に吸い込まれて行く

（評）診察の順番を待っている様子がただ語られるのではなく、冷やかな視線は自身の内側にも向けられ、それが作品を個性的なものにしています。硬質な言葉が生み出すユーモア。

入選

ラプソディ・イン・ポン菓子

東近江市
辰巳友佳子

ポンとこだまして
村の境内に春がやってくる
―米、豆、砂糖をもって
　この境内に集まって下さい
以前は子供だったお年寄りが
ぞろぞろ集まる

ポンとこだまして
乳房が張る
―野辺の山菜取りにいこう
嫁菜はさっと湯がいて
おかかをこんもり盛ったおひたし
早蕨の葉先が秘めてかたく
アク抜きが面倒だ

ポンとこだまして
戻り冬のドカ雪が降る
よその殿様と春の雪は怖くない
―今晩はフグ鍋にしよう
心配性の夫はふくれて
今夜こそ当たる
と嫌そうだ

ポンとこだまして
祖母を思い出す
祖母は田舎暮らしに馴染めず
ポン菓子より
ケーキが好きだった
お年寄りに混じって買う
口に頬張ると
はんなりと祖母が溶けた

（評）「ポンとこだまして」から始まるいくつもの想い出の時間と季節。野の匂い、ポン菓子の匂い、生活の温もりと存在感がいきいきと伝わってきます。登場人物が少し散漫になった点を残念に思いました。

入選

ようこそこの生きくい世界へ

西今町　空野星

ようこそこの生きにくい世界へ
どんな時も青と決めている貴方は
生まれくる日も空を見て決めたのか

大好きな青い機関車はいつも一緒
大切なお友だち
車体番号は全て丸暗記
だけどそれが真っ直ぐな線路を駆け抜ける
場面ではいつも決まって大声出してしがみつく
大好きなのに何故だろう

大好きなおままごと
お皿にたくさん盛りつけて
「おいしいおいしい」と食べるフリ
たくさん遊んで夜がきて夜ご飯
同じようにお皿に盛りつけるけど
いつも決まって一文字

悪いヤツをやっつけるツンツン頭のヒーロー
同じようにかっこよく散髪したいけど
ハサミで切るのがこわいんだ
だからいつも真夜中にママ美容室
朝が来たらヒーローに大変身

大好なおもちゃ屋さん
行きたいけどこわいんだ
ＴＶがあるとこわいんだ
大好きなあの機関車が脱線したらかわいそう

優しい心をもつ貴方が生きるこの世界に苦手なものが多過ぎて　どうしたものかと見上げた空は貴方が生まれてくることを選んだ青だった
この世界には美しい青い空も
お皿にのり切らないおいしい物も
数え切れない程の素晴らしい物がある
一つ一つ一緒にみつけよう
ようこそこの生きにくくも素晴らしい世界へ

（評）天使のように繊細な魂の到来を丁寧に見つめながら、愛情のこもった言葉で綴られているところが読者の共感を誘います。詩中、青の色が印象的に使われていることで、美しい作品にまとまりました。

入選

ゆずの香り

西今町
谷口明美

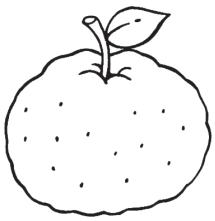
桃栗三年　柿八年
　柚子は九年の花盛り　というよ
小さなゆず苗を移植する
わたしの背後で
娘が　いぶかし気にいう

ゆず湯のあと
庭の片隅に捨てた実から
思いがけず芽生えた苗
かすかな香りを
感じたからだった
幼いころの
夏の冷やしそうめんは
格別なご馳走だった
父は　違わず
まだ熟さない小さな青ゆずの皮を
丹念に擦りおろしては
薬味にし
「うまいなあ」と音をたてて啜(すす)った
苦みと渋みのまじり合った
わたしには馴染めない味だった

それが　いま
脳裏のわずかなすき間から
七十年の時を経て
つと　美味にやさしく
還って来たのだった

　柚子は　九年の花盛り　か
　あなたのために植えておくわ
わたしは　幼い苗に
おもむろに水を注いだ

（評）「柚子は九年の花盛り」という言葉が、淡く美しく作品全体に陰影を与えています。九年後のことを考える時、作者の中に娘への想いと、微かな死をも含めた自身の未来を見ているのでは、という静かな祈りを感じました。



入選

レクイエム

野瀬町
水沢　郁

ぽつぽつと赤く散り敷いている
土手道のヤブツバキ
河口の枯れ葦が風に抗っている
黄蝶が目斜交いに飛び出してきて私を押しとどめる

遠くにいる従姉が六十になるかならないかという若さで亡くなって
故郷のこの湖に
魂をしずめることにしたという
いつぞやの知らせが突如よみがえる

小学生の私たちに
平均台の上で軽やかな舞を披露してくれた人
メキシコオリンピックの代表候補という触れ込みだった
久し振りに出会った東京の人は
こっそりと私に目配せしたようにも思え
仰ぎ見る太股の白さが眩しかった

西空の熾火が
身もだえする銀紙になって消えていく
ぬるい薄暗さが忍び寄る
あまい風がひたひたと湖面を舐めてくる
いずれ春雷がうごめきだすだろう
さざなみの湖面は打ち震え
うねり始め
白い波頭が天に向かって咆哮する

そうして
雨風のおさまる未明
月の湖は
静かに息づいていることだろう

（評）さりげない湖辺の描写が、今は亡き従姉の若い日の眩しい存在と共に、幻想的な世界を繰り広げていきます。作者を絡めとろうとする湖の幻惑、妖しさ。第四連で繰り返される修飾が少し過剰なように感じられました。

佳作

輪唱の冬

松原町　岡田麻耶

佳作

秋

西今町　松本トシ子

佳作

早春

西今町　花井守人

佳作

憩いは川面から

古沢町　真野美栄子

佳作

紫雲英

正法寺町　髙井豊

佳作

言ってない

西今町　久永朝子

佳作

主を失くした腕時計

芹橋一丁目　楠亀美恵子

佳作

「花かんむり」
-娘が嫁ぐ日まであとわずか-

岡町　宮地正子

《総評》

ＳＮＳでの素早い遣り取りが中心になり、ゆっくり考えたり感じたりすることや、時間をかけて丁寧に書き留めていくという作業が蔑ろにされているのでは、という危惧の中、昨年を上回る作品が多数寄せられたことに大きな安堵感を覚えています。感謝とともに一篇一篇に込められた思いを少しでも深く共有したいと、丁寧に読ませていただきました。

今年度は特に、参加してくださった皆様の作品が画一的でなく、それぞれにとても個性的だったことを素晴らしいと思いました。日々の暮らしに密接した詩から、生きることを深く捉えた世界まで、テーマも詩法も多彩で自由な作品ばかりで、選者の評点も大きく分かれてしまいました。そのことが取りも直さず「詩」の豊穣だと感じています。

昭和、平成、令和、私も自分の詩才の無さを嘆きつつも長く書いてまいりました。皆様の生きることの中に、どんな時も「詩」が在り続け、そして秘かに輝いていますように。

（尾崎　与里子）

選者詩

ことば―熾のような

石内秀典

だからといって
あなたが湖であったわけではない
深く沈めて
人の目につかないように
あの挨拶の深さを
閉じ込めていた

“おせんどさん”
お悔やみを申すときは
目は湖であった

しわに蔽われた
目であったが
あまりにも深いため
誰も向こう岸には着けなかった

どれだけ貧しくて
泥にまみれていても
時の向こうの
乾いた地に
いたるところに浮かんでいた
あの瞳だけが水だ

無垢

尾崎与里子

かすかな匂いはどこからだろう
満員の電車から押し出されると
手のひらの小さな銀板から
「令和」になりましたと
明るい声が話しかけてくる
文字に様々な意味を含ませて
言葉に想いを絡ませる
絡ませ過ぎて世界が
少し歪んで見えるから
湖に向って
はるか以前に出会った物語の懐かしさへ
私は降りて行く
生きている時代の悲嘆はこんなにも深いのに
私の不幸はいつもささやかだ
濡れた砂
足許に形を無くしている腐臭のぬめり
対岸の山々の濃い青
ゆれている花にひそむ尖った種子
刊行されることの無かった
一冊の詩集
その中の無垢な死のために
私は今日小さな声で祈りたい

晩秋物語

山本英子

鍋の愛しているのが自分ではないことを　女はよく知っていた　火にかける度に全身を熱くし　身もだえてなお一しずくの恋情も噴きこぼさない　強い小さな物体のそばで　女も又あふれでようとする恋想いに耐えて　立って　生きてきたのだけれど　そのようにして十二年　ひたすら別の女を恋する鍋を恋して火にかけ　女はそれで自らのさみしい食事を煮たのだ

そうして女の住まいに白い霜が降りる頃　枯れたあけびをくわえて　一夕　きつねが戸口に立つことがある　町の男から得た干魚を女が差し出すのをその年も固く辞して

なべは元気か

ときつねは問う　チロチロと火の燃える老いたけものの両眼に濡れながら女がだまってうなづくと

そうか　それはよかった

やがてきつねの尾姿がすすき野にまるく落ちてゆくと　入れかわりにあでやかな満月がのぼってくる

障子も閉てず長く立ち尽くした後で　ふと女は思う

今宵あたしは食事はすまい

いまだ単衣の着物の裾を割り　冷たい素足の足裏みせて横座りながら　さらに女は思う

もはやあたしは食事はすまい

※

もうあなたを火にかけることはないわ

ひとり冴え冴えと笑った女の胴が風にま二つに切られると　火の気のはたと絶え　格子窓からさしてくる月光の中に強く漆黒の鍋はうかびあがり　その縁を　静かに一滴あふれ出てつたって流れ落ちてゆく涙とは呼ばないものがあった